

# 理科教員・養護教諭志望学生を対象とした合同ロールプレイ 演習教材の開発と実践（Ⅱ）～実践報告～

森重比奈<sup>1)\*</sup>・野村 純<sup>2)</sup>・土田雄一<sup>2)3)</sup>・加藤徹也<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup>東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科・博士課程

<sup>2)</sup>千葉大学・教育学部

<sup>3)</sup>千葉大学・教育学部・附属教員養成開発センター

## Development and Practice of Cooperative Role-play Exercise for Pre-service Science Teachers and School Nurses (II) ～Practice Details～

MORISHIGE Hina<sup>1)\*</sup>, NOMURA Jun<sup>2)</sup>, TSUCHIDA Yuichi<sup>2)3)</sup> and KATO Tetsuya<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup>Doctoral Course the United Graduate School of Education Tokyo Gakugei University

<sup>2)</sup>Faculty of Education, Chiba University

<sup>3)</sup>Center for Research and Development in Teacher Education Faculty of Education, Chiba University

学校における危機管理には、「事前」、「事故等発生時」、「事後」の3つの段階があり、学校危機管理においては、事故の未然防止だけでなく、事故発生を想定したクライスマネジメントも重要である。事故対応をシミュレートすることは、いざ事故が起きたときの冷静な対応につながる。学校事故に関する様々な事態の想定は教員として不可欠なものである。そして、新任として教職に就き、ひとたび事故が発生すれば当事者としての対応が求められる。そこで、理科教員と養護教諭の志望学生が共に学ぶ合同のロールプレイ演習教材を開発した。本報告では開発したロールプレイ演習教材を用いた授業実践について報告する。授業実践に参加した学生の学びについて質問紙により調査したところ、開発した教材を用いた授業は、お互いの職と連携を意識することのできる良い機会をつくり出すことが出来ていた。さらに、参加学生が事故発生時の対応の流れを多様な視点から確認できたことや、理科および養護教諭の教員志望学生双方の連携意識が強まったことも推察された。

キーワード：ロールプレイ (role play), 理科教員 (science teacher), 養護教諭 (school nurse),  
教員養成 (pre-service teacher training), クライスマネジメント (crisis management)

### I はじめに

学校事故における危機管理は、事前・事故等発生時・事後の3つの段階に分けられる（千葉県教育委員会、2021）。学校危機管理においては、事故の未然防止を目指すリスクマネジメントは広く行われているが、事故発生を想定したクライスマネジメントも重要である。学校で起きる事故を想定し、教職に就く前の学生のうちに事故対応をシミュレートすることは、いざ事故が起きたときの冷静な対応につながる。しかし、教育実習においては「生徒との関わり方」や「教科の指導方法」を重点的に学び、この中で、保護者対応や他教員との連携が必要な対応についての経験を得ることはほぼない。事故のない安全安心な学校、というのはもちろん理想ではあるが、学校においてゼロリスクをつくり出すのは不可能である。そのため、様々な事態の想定は教員として不可欠なものである。また、新任として教職に就き、ひとたび事故が発生すれば当事者としての対応が求められる。

そこで我々は、教員養成を担う学部授業の学びの中に、普段の授業でも起こり得る事故やケガの対応方法を学ぶ

機会をつくるのが重要であると考え、理科教員と養護教諭の志望学生が共に学ぶ場を創出し、これらの学生による合同のロールプレイ演習教材を開発した。ロールプレイ演習教材の開発の経緯については別に報告した（森重ら、2023）。本報告では前報で開発した教材を使用した授業の実践と、それによる学生の学びについて報告する。

### II 方法

実践は2022年7月、国立大学教育学部の理科教員を目指す学生10名（3年生）と養護教諭を目指す学生4名（4年生2人、3年生2人）を対象に、「理科の授業中の火傷」というテーマで授業1コマ全体を使って行った。学生を3つのグループに分け、各グループに養護教諭志望学生1人を必ず含むようにした。

【授業の流れ】

授業時間：90分

1. ロールプレイの設定の確認（10分）
2. グループ討議（ロールプレイ用原稿作成）（30分）
3. グループ毎にロールプレイ（15分）
4. 現職教員による解説とフィードバック（20分）
5. アンケート（5分）

\*連絡先著者：森重比奈 hina.mrsg@gmail.com

【ロールプレイの配役】

- 理科教員：理科教員を目指す学生（以下理科の学生）
- 養護教諭：養護教諭を目指す学生（以下養教の学生）
- 管理職：校長経験のある大学教員
- 保護者：大学教員

Ⅲ 授業実践

まず、授業実践の詳細を以下の1～5に述べる。

1. 学生には課題（表1）に示した具体的な状況に対する対処の実際についてロールプレイを行うことを説明した。
2. 理科教員あるいは養護教諭としての行動のための原稿（台本）を、グループ討議で作成させた。この際、理科教員志望の学生、養護教諭志望の学生はそれぞれの教員としての立場から別々に討議を行った。台本作成の段階では「理科室での事故発生・保健室での生徒来室」から「保護者への電話」という条件のみ与えた。学生は台本の作成にあたって、事故発生から保護者への連絡というこれまでに学んだことのない一連の対応を考えることに苦労した様子であった。ワークシートでは管理職への報告を項目として挙げていないグループや、保護者への連絡まで記入できていないグループもあり、これらからも対応の仕方に悩む姿が見られた。また、管理職への報告は理科と養教のどちらがするかなど、自身の考える役割と、実際に学校で求められる役割とに齟齬が生じた項目もあった。
3. ロールプレイは各グループの理科の代表学生1名と養護の学生1名が各々が作成した原稿に沿って進めた。さらに、管理職役の大学教員や、保護者役の大学教員からのより深い情報共有のための質問等にもその場で

対応させた。

ロールプレイの中では全てのグループが「養護教諭との情報共有」、「管理職への報告」、「保護者連絡」の順で演じていた。ワークシートで作成した原稿に不備があったグループも、先にロールプレイしたグループの良い点を取り入れることで、ワークシート上では足りない項目を補っていた。特に、管理職への報告について事前に計画を記入していないグループは、自身のロールプレイ時には前グループのロールプレイから学んで、アドリブで管理職報告を追加しており、管理職への報告の重要性を認識させる上でロールプレイの体験と見学が有効であることを示唆していた。さらに、管理職への報告を校内電話で行ったグループがあった。その際、管理職役がこの行為を不適切と捉えその教員（学生）を校長室に呼び出し指導するという展開になった。このような適切とは言えない行動の共有ができていた点も、学校現場に出る前の学生にとって良い学びの機会になったと考えられる。また、校長経験のある大学教員が管理職役を演じ、実際に近い雰囲気をつくりだしていたため、学生には受け答えの1つ1つがリアリティを感じさせるものとなり、現場の緊張感に近い場面で臨機応変な対応を求められていた。

4. ロールプレイ後は、「事故対応チェックリスト」を学生に配布し、現職教員（養護教諭1名、中学校の理科教員2名、管理職経験のある大学教員1名）が学生のロールプレイのフィードバックと対応・連携の方法についてこのチェックリストに基づき解説した。ここでは、現職教員が自身の経験を織り交ぜながら解説を行った。話を聞く学生からは、配布された事故対応チェックリストにメモを書き込む様子が見られ、対応の根拠についての理解も深まったと考えられる。

表1 ロールプレイ用題材の設定（森重，2023）

<p>【前提となる設定】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 1クラス35人、(中学校2年生または小学校6年生)</li> <li>・ 授業者1人</li> <li>・ 理科室に電話なし</li> <li>・ 自身が担任するクラスの理科の授業</li> <li>・ ケガをした生徒Aの名前は「千葉太郎」</li> <li>・ けがの程度は右手の掌の火傷(1.5cm程の水ぶくれができる)</li> <li>・ 電球の温度を体験しようとして自ら触ってしまう</li> <li>・ 理科室には保冷剤・氷・水道・水桶・ビニール袋・冷却シート・救急箱(ガーゼ, 絆創膏, 消毒液, 体温計)がある。</li> <li>・ 授業は3時間目</li> <li>・ 理科室は3階にあり, 保健室は1階にある</li> <li>・ 保健系の生徒がいる</li> </ul> <p>【事故の状況に関する設定】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 消費電力と電気器具のはたらきの関係についての理解を深めるために, 40Wの白熱電球と100Wの白熱電球の明るさの違いを確認する演示実験を行います。2つの白熱電球には消費電力を確認するために電流計と電圧計が取り付けられています。</li> <li>・ 3分ほど点灯させながら「注目してほしいポイントがあること」と「電球は熱いので触ってはいけないこと」について説明した後, 電流計と電圧計の表示を読むために生徒を教卓の前に集めることにしました。</li> <li>・ 前列で見ていた生徒Aが100Wの白熱電球に掌で触ってしまいました。掌を見ると赤く腫れていました。</li> </ul>
---

5. 授業後に、学んだことや感じたことについての振り返りを自由記述形式で書かせた。この振り返りは、
- A. 事故発生時の理科室での対応について
  - B. 理科教員と養護教諭のやりとりについて
  - C. 管理職への報告について
  - D. 保護者への連絡について
  - E. 全体を通して
- のそれぞれについて記述を求めた。

#### Ⅳ 授業による学びの分析結果

授業後に実施した振り返りシートへの記述をもとに「ロールプレイ授業による学生の学び」を分析した。参加学生の記述から、A～Eの場面ごとに数個のカテゴリを生成し、表にまとめた（表2～6）。

##### A. 事故発生時の理科室での対応について

事故発生時の理科室での対応についての自由記述から、『応急処置』、『生徒対応』、『その他』のカテゴリを生成した（表2）。

『応急処置』がもっとも大きなカテゴリとして抽出された。理科の学生は、通常のカリキュラムでは、応急処置について体系的に学ぶ機会にはほほ少ない。このため、本ロールプレイの中で大きな戸惑いを感じたものとする。実際に火傷に対して「具体的な処置の内容を知らなかった」、「流水は水が用意できるまでの処置だと考えていたので流水での処置の重要性を認識した」などというものがあり、火傷の応急処置の知識を正しく身につけていない学生が複数いることが示唆された。火傷は日常生活の中でも経験の多いケガであるが、冷却に必要とする時間や「冷却の際は氷を使用しない」など、基本的と思われ

る処置の方法を知らなかった学生にとっては、正しい知識を得る良い機会になったと考えられる。

さらに、実践力を高めることを目指すとした場合、現場での指示についても学ぶ必要がある。例えば、流水での5分間という冷却時間は体感としてはかなり長い。筆者がTTとして中学校の理科の授業に入った経験では、生徒は火傷の冷却中であっても、教員が話し始めると水道を止めてしまい教員の話しを聞こうとする場面に遭遇したことがある。したがって、実際に教室で生徒の火傷対応にあたる際は、教員は意図的に十分な冷却時間の確保を意識して生徒を指示することが必要であるとする。このような現場での具体的な対応に関しては経験豊富な現職教員を交えた学びが重要であると考えられた。

『生徒対応』は2番目に抽出された項目であり、記述内容には、「本人の感じる痛みの在り方」、「聞き取りからの様子」など、生徒からの聞き取りの大切さについての学びがあったことが示唆された。さらに、周りの生徒への指示の重要性についての記述もあった。

なお、『その他』の記述に「管理職への報告はどのタイミングで行うのが適切かは少し混乱した」という感想があった。ロールプレイ用台本を作成するためのワークシートには、報告のタイミングの例として「授業終了後の休み時間に行う」を記載していたが、受講生がこの設定を十分に読み取れなかったことが考えられる。この結果、授業時間中の設定でロールプレイを行ったグループがあった。一方、チェックリストでも「休み時間」として示していたが、非常時においてはこの限りではなく、状況に応じたタイミングの判断についても振り返り時に丁寧な説明が必要であることが示唆された。

表2 事故発生時の理科室での対応について（理科の学生10名のみ）

カテゴリ	記述内容
応急処置	<p>〈理科室に都合よく対応道具があるかわからない。そのため自分で用意する必要があるかも。〉</p> <p>〈具体的な処置の内容を知らなかったため、具体的な処置のあり方を知らないといけなさと共に、理科室での整備の確認をしていけなさと感じました。〉</p> <p>〈想像以上に長い時間冷やす必要があると思った。〉</p> <p>〈流水で5分以上流し続けるのは長いと感じた。流水は水が用意できるまでの処置だと考えていたので流水での処置の重要性を認識した。〉</p> <p>〈流水で冷やすという処置には問題なかった。〉</p> <p>〈流水で5分という時間について考えていなかったため、どのくらい冷やすべきかを知っておく必要があると思いました。〉</p> <p>〈応急処置を行うという点では相違なく対応できていたので少しはホッとした。〉</p>
生徒対応	<p>〈本人の感じる痛みのあり方や、時間変化にも気を配ることも大切であると気づかされました。〉</p> <p>〈自分の見ていた様子だけでなく、本人への聞き取りからの様子も必要であった。〉</p> <p>〈他の生徒への対応は考えなくてよいのかと思いました。〉</p> <p>〈事故をした生徒以外の生徒への指示の重要性も感じた。〉</p>
その他	<p>〈火傷はよくある事故であるので、あまり大きなことと捉えられていない部分がありましたが、どのようなケガや事故であれスピーディに対応することが大切だと感じられました。〉</p> <p>〈チェックリストでは授業再開している部分も見られ、管理職への報告はどのタイミングで行うのが適切かは少し混乱した。〉</p> <p>〈教師は焦らずに対応する必要があると分かった。〉</p>

表3 理科教員と養護教諭のやりとりについて（理科の学生10名、養教の学生4名）

カテゴリ	記述内容
情報共有	<p><b>【理科】</b>                      〈理科教員の立場からすると、養護教諭に報告するのと、様子やケガのレベルを確認する程度と考えていました。〉                      〈時間を追うようにして細かく事実を伝えることがその後の対応を考える上でも大切だと感じました。〉                      〈できるだけのことを細かに正確に様子を伝える必要があると思った。〉                      〈正確に事実（ケガの様子や処置など）を伝えることは難しいと感じた（台本の「3分冷やした」というのを飛ばしてしまった）。〉                      〈保護者への連絡をする前に伝えておくべきことを養教の先生に聞いておくべきだと思いました。〉                      〈情報共有をかなりこまかい部分まで行う必要があると実感した。〉                      〈理科室での応急処置の詳細を伝えることはわかっていたがどれくらいの時間冷やしたのかも伝える必要があるのはわからなかった。〉                      〈事実確認を行う点では一致しており、より「ホウ・レン・ソウ」の重要性を実感した。〉                      〈ささいなことでもその場で行ったことを報告すべきだと学んだ。〉</p> <p><b>【養教】</b>                      〈養護教諭として何を伝えるべきかが明確になった。〉                      〈状況や報告の内容など打ち合わせが大切。〉                      〈教員との情報共有で相手が何をするのか、何をしたのか、また教員の保護者への連絡まで考えることがなかったので、自分ではなく担任が状況を伝えるときに何を話すべきかが考えられた。〉</p>
自身の役割	<p><b>【理科】</b>                      〈誰がどの役割をするのか状況把握がきちんとできているか相談しながら現場では行っていきたい。〉                      〈保護者への連絡事項や今後の対応についてまで連携して対応することも求められることは学びになりました。〉                      〈報告後は養護教諭が中心となって管理職報告を行うと思っていたので私（理科教員）が中心となるのは少し驚いた。〉</p> <p><b>【養教】</b>                      〈病院への受診の判断や処置などを確実に行う必要がある。〉</p>
その他	<p><b>【養教】</b>                      〈知識の有無や対応のマニュアルを作っておくことも大切だと感じた。〉                      〈やけどの対応を知ってもらえるとありがたい。養教として、教員の方々にケガの対応を学んでもらえるような機会を提供する必要がある。〉</p>

### B. 理科教員と養護教諭のやりとりについて

理科教員と養護教諭のやりとりについての自由記述から、『情報共有』、『自身の役割』、『その他』のカテゴリを生成した（表3）。

『情報共有』はチーム学校での対応の基礎である。しかし、学生の記述には「様子やケガのレベルを確認する程度と考えていました」、「情報共有をかなりこまかい部分まで行う必要があると実感」など、お互いが共有すべき情報内容を十分認識できていなかった学生が多くいたことが推察できた。そして、このロールプレイが情報共有の重要性への気づきを促すきっかけとなることが示唆された。

『自身の役割』は、当事者としてどのような役割があり、どのように行動するかについての気づきについて書かれていた。理科の学生の記述には「保護者への連絡事項や今後の対応についてまで連携して対応」、「報告後は養護教諭が中心となって管理職報告を行うと思っていた」などがあり、自身の授業中に起きたケガに対する一連の対応を行う役割であることを認識してはいたが、管理職報告が自分の役割であることまでは認識できていない者がいた。

情報共有は、その後の対応を相手に引き継いでもらうためではなく、その後の対応を判断し、連携して実施す

るうえで重要なものである。それぞれの役割についての認識の齟齬は、対応の遅れや教員間の不調和を引き起こす原因となる。このため、情報共有における役割分担の正しい認識や些細なことでも確認するような相互コミュニケーションを習慣化するために、体系的学びが必要となると考えられた。さらに、養教の学生の指摘にある、「知識の有無や対応のマニュアルを作っておくことも大切」に対応した教員養成で活用可能な事故対応マニュアルの作成や、「教員の方々にケガの対応を学んでもらえるような機会を提供」を可能とする学びの場の提供など、学校現場に出たときの円滑な連携のためのさらに実践的な教育内容を含む学習プログラムの開発が必要と考えた。

### C. 管理職への報告について

管理職への報告に関する自由記述を『報告内容』、『意思表示』、『連絡方法』、『その他』の4つのカテゴリを生成した（表4）。

『報告内容』に関する記述内容から、「簡潔にまとめてわかりやすく報告」、「管理職報告は端的に」など、報告内容を簡潔にまとめることに苦労した学生が多かったことが伺えた。

さらに、『意思表示』に関する記述では、「自分で「どうするのか」の見通しを持って報告」、「今後の対応につ

表4 管理職への報告について（理科の学生10名，養教の学生4名）

カテゴリ	記述内容
報告内容	<p><b>【理科】</b>            〈簡潔にまとめてわかりやすく報告する。〉            〈お互いの時間を大切にするためにも伝えるべきことは簡潔に伝える習慣を身につけたいと思います。〉            〈忙しい中なので、できるだけ簡潔にまとめて報告したい。〉            〈管理職報告は端的に〉            〈端的にまとめて報告し、方針を伝えた上で判断していただき最終的な報告の必要性を学びました。〉※</p> <p><b>【養教】</b>            〈報告すべき内容をまとめることを意識した。〉            〈実際の報告のロールプレイは初めてだったので管理職にどう説明し、何を説明するのかロールプレイ後のフィードバック含めて勉強になった。〉            〈短くまとめて報告する必要がある。〉</p>
意思表示	<p><b>【理科】</b>            〈管理職に対応を仰ぐのではなく、自分が提言する。〉            〈教員として考えを提案する姿勢の大切さ。〉            〈自分で「どうするのか」の見通しを持って報告をしたい。〉            〈管理職報告は「しようとしている行動が良いかどうかの確認」という視点はなかった。〉            〈端的にまとめて報告し、方針を伝えた上で判断していただき最終的な報告の必要性を学びました。〉※            〈どのようにすべきかと聞くのではなく、提案する視点で報告の仕方を考えていく必要があると感じた。〉</p> <p><b>【養教】</b>            〈子どもの状況を伝えるのはもちろんだが、今後の対応について自分の意見をもって行うべきであると知った。〉</p>
連絡方法	<p><b>【理科】</b>            〈電話で報告してはいけない。〉            〈電話ではなく直接報告，そこまで重要だと思っていなかったが、今後の保護者との関係や再発防止のために必要だと感じた。〉            〈どんな状況でもケガや子どもの命に関わることは直接「何の報告か」を伝えることが大切である。〉</p> <p><b>【養教】</b>            〈直接報告する〉</p>
その他	<p><b>【理科】</b>            〈とにかく緊張した。〉            〈生徒の命や身体をいかに大切にすることの重要性を改めて感じた。〉            〈おそらく教員になったら管理職と話すことさえ、かなり抵抗感があるように思います。しかし、こわがってしまい、事実を正確に伝えられないということが決してないように気を付けたいと思いました。〉            〈正直、ロールプレイを行ってお話を聞くまでは管理職の存在の意味や報告の意味が曖昧だったが、今回その内容をよく理解することができた。〉</p> <p><b>【養教】</b>            〈今回は理科教員に報告をお願いしたが、けがをして来室した時点で授業内でのケガとして報告しなければいけないと感じた。〉            〈跡が残るかどうかを気にすることが大切だと感じた。〉</p>

※は重複カテゴリあり

いて自分の意見をもって行うべき」などの気づきが示唆された。したがって、ロールプレイを行うまで事実報告と同時に今後の対応について「何をしようと考えているのか」を管理職に伝える必要があることを知らない学生がいたことがわかった。重大な事故が発生した場合は管理職に今後の方針について指示を求めることも時には必要である。一方、今回のような日常的に起こりうる事故では、特別な対応を求められることは少ないため、管理職に「指示を求める」ではなく一連の対応に自分自身で見通しを持った上で「対応とその方針を報告し確認を求める」ことが求められる。今後この学びを強化するために、振り返りで用いる事故対応チェックリストを改善し、

管理職への報告事項に加えて、自らの意思を提供するような項目を加えたい。

なお、管理職への連絡方法として「電話で報告してはいけない」、「電話ではなく直接報告」など、校内電話の使用に関する記述がみられたが、これはロールプレイ時に、管理職への報告を校内電話で行ったグループがあったためである。その際、管理職役がこの行為を不適切と捉えその教員（学生）を校長室に呼び出し指導するという展開になった。このため、管理職への報告においては伝達方法も重要性であることの認識が深まったと考えられた。学校現場において管理職への報告は対面で行うのが普通であるが、教職経験のない学生にとっては学校

表5 保護者への連絡について（理科の学生10名，養教の学生4名）

カテゴリ	記述内容
連絡の仕方	<p><b>【理科】</b>                      〈保護者の感情のもつれを無くすように努める。〉                      〈さまざまなケースに対応できるよう，対応力を磨く必要があると感じられました。〉                      〈保護者に安心してもらえるような連絡や言葉の使い方をしたい。〉                      〈詳しく丁寧に状況を伝えた後，謝罪すべきだと学びました。〉※</p> <p><b>【養教】</b>                      〈保護者の意向を尊重して安心できる声かけを行うことが大切であると感じた。〉</p>
連絡事項	<p><b>【理科】</b>                      〈保護者に対して謝ることや状況を伝えることとは別で，今後の対応や注意点，家庭での指導のお願いなども把握する必要があると思いました。〉                      〈あせってしまい，謝罪を忘れてしまった。学校にマニュアルがあると思うが，それに関わらず「事実報告」「今後の処置」「謝罪」を忘れずにしたい。〉※                      〈学校側での対応を伝えてから判断をもらう。〉                      〈保護者の意見も求める必要があることを知った。〉</p> <p><b>【養教】</b>                      〈「水ぶくれはつぶさない」という家庭で行ってほしい処置方法については，子どもだけでなく保護者にも伝える必要があると感じた。〉</p>
謝罪	<p><b>【理科】</b>                      〈あせってしまい，謝罪を忘れてしまった。学校にマニュアルがあると思うが，それに関わらず「事実報告」「今後の処置」「謝罪」を忘れずにしたい。〉※                      〈時には謝ることも大切と学んだ。〉                      〈詳しく丁寧に状況を伝えた後，謝罪すべきだと学びました。〉※                      〈ケガをさせてしまった側であるため，まずは謝罪。しかし，今後のクレーム等も考慮して過度な謝罪は行わない方がよい。〉</p>
その他	<p><b>【理科】</b>                      〈初めの想定では，保護者連絡は養護教諭が行うものかと考えていたが，担任の教員が行うことがわかった。〉</p> <p><b>【養教】</b>                      〈連絡する前に伝えてほしいことを担任に伝えていくことが大切。連絡者との連携が重要だと思った。〉                      〈保護者への連絡を養教がするのか，担任がするのか確認が必要。〉                      〈病院への受診の有無などケガを想定することで考えが明確になったように感じる。〉</p>

※は重複カテゴリあり

現場の管理職との情報共有方法を知る好機になった。

『その他』では、「管理職の存在の意味や報告の意味が曖昧だった」など，管理職報告の感想が記述されていた。グループワークの中で作成したロールプレイ用原稿をみると，管理職への報告について事前に計画を記入していないグループがあったが，他のグループのロールプレイを見ることで，管理職への報告の重要性を認識しており，ロールプレイの体験とともに見学することが気づきと学びに有効であることを示唆していた。管理職への報告の仕方については，他の授業で学ぶ機会もなく，難しさを感じた学生が多かったようである。

さらに、「とにかく緊張した」という記述もあり，臨場感のある実践的体験となったことが伺えた。

#### D. 保護者への連絡について

保護者への連絡についての記述から『連絡の仕方』、『連絡事項』、『謝罪』、『その他』のカテゴリを生成した(表5)。

『連絡の仕方』では、「保護者に安心してもらえるような連絡や言葉の使い方」，「保護者の意向を尊重して安心

できる声かけ」など，保護者の気持ちを考えての対応についての記述がみられた。

『連絡事項』では、「今後の対応や注意点，家庭での指導のお願い」など，事実の説明だけでなく，家庭での今後のケガの処置方法を伝えることが必要なことなど，どのようなことを保護者に伝える必要があるかについての学びがあったようである。また，今後の対応については「保護者の意見も求める必要がある」など，保護者に相談し最終的な判断は保護者にしてもらうということについての気づきに関する記述もみられた。

保護者は，連絡を受ける時点では事故の状況やケガをしてしまった子どもの様子を直接見ていない。このため，電話連絡では，学校からの事故発生に関する電話に不安を感じる保護者に，事実を伝えるだけでなく，その心情を理解した上で，情報共有する必要がある。さらに多くの場合，ケガへの対応に関して家庭での協力を求める必要がある。したがって，保護者との関係を良好に保つために，状況説明や現状に関する丁寧な対応が欠かせないことを学生に理解させることの必要性も示された。

一方、『謝罪』については、報告Ⅰ（森重ら，2023）でも示したように事故対応チェックリスト作成時に現職教員が話し合う中で意見が二つに分かれた。「ケガをさせてしまったことに謝罪する（授業中にケガをさせてしまったのだから、授業担当者として）」という意見と、「心配をかけたことのみ謝罪する（教員の落ち度でケガをさせてしまったわけではないため）」という意見である。後者の根拠は、保護者や家庭環境の多様化により過度な謝罪は避けるべき、とする地域もあるからというものであった。どちらも現職教員が実践している対応であるため、本授業における事故対応チェックリストには「ケガをさせてしまい申し訳ございません。」と「心配をおかけし申し訳ございません。」の両方を記載している。このため、受講生からは「時には謝ることも大切」という感想が得られた。どのような謝罪がベストであるか、一概に教示することはできないが、全てのケースで誠意をもった対応が求められることは明らかであり、選択の余地をもたせることも重要であると考えられた。

また、「初めの想定では、保護者連絡は養護教諭が行うものかと考えていた」、「保護者への連絡を養教がするのか、担任がするのか確認が必要」など、保護者への連絡は理科教員の役割であるか養護教諭の役割であるか判

断に迷う学生が少なからずいた。今回の題材では授業担当者かつ担任である理科教員が連絡をするように設定したが、実際の学校現場では事故の状況などにより臨機応変な対応が必要であり、教員間でお互いに相談することが求められる。また、養教の学生からは「連絡する前に伝えてほしいことを担任に伝えていくことが大切。連絡者との連携が重要だと思った」という記述があり、保護者への連絡の内容には養護教諭による所見を含めることも必要であるため、両者のコミュニケーションのとれた連携は欠かせず、これに対する気づきも示された。

#### E. 全体を通して

授業全体を通じた学びや気づきについての記述からは、『自身の役割や連携』、『視野の広がり』、『授業の感想』のカテゴリを生成した（表6）。

『自身の役割や連携』では、「教員としての振る舞い方や教育活動も土台となる概念などを改めて見つめるいい機会」、「養護教諭と教員の関りの大切さを実感」など、受講生が自身の役割や他教員との連携の重要性を再認識することができたことがわかる。また、ロールプレイでの他者との関りを個々に検討することや、現職および教職経験のある、理科教員、養護教諭、管理職それぞれの

表6 全体を通して（理科の学生10名、養教の学生4名）

カテゴリ	記述内容
自身の役割や連携	<p>【理科】</p> <p>〈事後を想定したロールプレイより、教員としての振る舞い方や教育活動も土台となる概念などを改めて見つめるいい機会になったと考える〉</p> <p>〈実際に近い形でそれぞれの役割や果たすべきことを確認することができてよかったし、活かせるようにしていきたい〉</p> <p>〈養教だけでなく、教員や管理職と連携することをもっと学びたいと思った〉</p> <p>【養教】</p> <p>〈養護教諭と教員の関りの大切さを実感した。自分は何をすべきなのかの判断を確実に行いたい〉</p> <p>〈養教と他の教員、管理職、保護者の情報共有の重要性を知れた。また、正確な対応と応急処置の用法が重要であると改めて感じた〉</p>
視野の広がり	<p>【理科】</p> <p>〈今回は火傷という一例のみについて扱ったが、様々なケースがあると思われるので、これからさまざまな対応についてもこのように考える機会を自分から作りたと思いました〉</p> <p>〈子どもや管理職、保護者など様々な視点で考えて事故対応をしたいと思った。沢山の人が関わるので沢山の視点から考える必要があると思った〉</p> <p>〈生徒への配慮や報告内容、仕方など考えるべき所がまだまだあったと思いました〉</p> <p>〈自分が思っているより、多くのやるべきことがあると感じた。日常から、事故現場を想定しておくことが重要だと感じた〉</p> <p>【養教】</p> <p>〈養教以外の視点から受傷～対応の流れを確認することが出来て良かった〉</p>
授業の感想	<p>【理科】</p> <p>〈ロールプレイを行わなければ確実に現場で問題をおこしていたと考えられる。千葉大や中理のみにとどめるのではなく、もっと広く普及していいと考えた〉</p> <p>〈とにかくあせってしまった。今回の授業を基にしっかりと想定しておきたい〉</p> <p>〈マニュアル等は無くても、何が適切かを考える必要がある〉</p> <p>〈実際の現場にあった時、経験していないとあたふたしてしまうと思うのでこのような機会を設けてもらい良かった〉</p> <p>【養教】</p> <p>〈実際の場面を想像すると難しいと感じた〉</p>

立場の経験者からのフィードバックや解説を聞くことで、参加した学生は様々な視点を得ることができていた。特に、相手の役割を知ることや相手の立場への理解を促すうえで非常に効果的であると考えられた。これらは学校においても円滑な人間関係に欠かせないものである。

『視野の広がり』では、「これからさまざまな対応についてもこのように考える機会を自分から作りたい」、「日常から、事故現場を想定しておくことが重要」などの記述から今回の授業を機に、他のケースについても考えてみたいという意欲的な意見があった。ここから、教員の職務に対するイメージが広がり、より実践力を高めようとする意識の醸成につながったことがうかがえる。「経験していないとあたふたしてしまうと思うのでこのような機会を設けてもらい良かった」、「もっと広く普及していいと考えた」などの記述もあり、本ロールプレイが学校現場に出る前に想定しておくべきものを学ぶ機会として好意的にとらえられていたことが示された。したがって、本ロールプレイが養成段階における実践力を高める授業プログラムとして需要があることが推察された。

## V まとめ

本研究では、理科と養教の学生の合同のロールプレイ演習教材の実践を通じた学生の気づきと学びについて、参加学生の振り返りシートの自由記述をもとに、この教材が学生に与える効果についての検討を行った。

本実践におけるロールプレイは、免許種を越えた新しい学びの場をつくり出し、事故対応における理科と養教学生の連携の意識と具体的な手続きを学ぶ機会を創出した。この中で、学生はこれまでの教育課程では学ばなかった実践的な体験学習が可能になった。

本授業で活用したロールプレイの利点として、「対人関係を体験的に学習することができる」、「他人の立場を理解できるようになる」などが挙げられる（中川, 1987）。また、本教材では、1つの題材であっても様々なパターンの共有が可能性であり、間違った選択の共有も一つの学びとなる。実際、他グループのロールプレイをみて、自身のグループのロールプレイに生かす場面も

見られ、意欲的にロールプレイに取り組む姿があった。振り返りシートからは本授業を通して、自身の役割や他教員との連携についてのイメージを膨らませることができたという肯定的な意見があり、開発した教材の教育的効果が推察された。また、理科と養教の学生の合同授業は、お互いの職と連携を意識することのできる良い機会になった。

本実践では、時間の都合から、生徒役を設定しなかったため「生徒からの聞き取り」をロールプレイすることはなかった。実際の学校現場では、生徒がいないという状況はないため、本教材においてもまだまだ工夫の余地がある。また、ミドルリーダーに対する若手教員育成トレーニングという観点も加味し、教職大学院の現職教員の管理職としての学びも加えることで、より学校現場の実情に近いコミュニケーション力育成ロールプレイを設計することが出来るのではないかと考える。これらを踏まえて、今後は、教職実践演習など、教職に就く直前の必修授業での活用を目指す。

## 謝 辞

本研究において、野村裕美子先生、吉本一紀先生、川又美穂先生、宮原里奈先生、野田市養護部会研究班の先生方に多大なるご協力をいただきました。この場を借りて感謝申し上げます。

本研究の一部はJSPS科学研究費補助金挑戦的研究（萌芽）20K20812の助成を受けて実施しました。

## 参考文献

- 千葉県教育委員会（2021）「学校安全の手引」。  
 森重比奈，野村純ほか2名（2023）「理科教員・養護教諭志望学生を対象とした合同ロールプレイ演習教材の開発と実践（I）～開発報告～」，千葉大学教育学部研究紀要，第71巻。  
 中川米造（1987）「ロールプレイ」医学教育，第18巻，第2号，pp. 149-151。